池田本校訂本文「帚木」巻小見出し（132 項目）

池田本の校訂本文で使用するための小見出しの、「帚木」巻ができあがりました。
これは、高橋麻織さん（明治大学・兼任講師）と久保田由香さん（元・明治大学大学院生）の労作です。

「桐壺」巻・「若紫」巻と同じように、３０文字でできています。
これまでの方針通り、物語本文を細かく分けることで、全１３２項目となっています。

『新編日本古典文学全集』（小学館）は１７項目、『新日本古典文学大系』（岩波書店）は３４項目なので、これがいかに詳細なものであるかがおわかりいただけるかと思います。

今回公表したものは、まだ付加情報の整備ができていません。今は、『新編日本古典文学全集』（小学館）の頁行数だけを追記した状態であることを、あらかじめおことわりしておきます。

（１）通し番号　小見出し（３０文字）
（２）『新編日本古典文学全集　源氏物語』（小学館、1994 年初版）の頁行数

「帚木」巻の小見出し（『新編日本古典文学全集』（小学館）の頁行数）

■１　光源氏は好色者と噂されているが、本人は真面目に振る舞っている
（五三頁一行目～七行目）

■２　通いが間遠なため左大臣家では光源氏の忍ぶ恋の相手の存在を疑う
（五三頁八行目～五四頁二行目）

■３　左大臣家は物忌のために籠る婿を恨めしく思うが懸命に世話をする
（五四頁三行目～八行目）

■４　光源氏と特に親しい頭中将もまた、北の方の元にはあまり通わない
（五四頁八行目「宮腹の中将は」～一一行目）

■５　光源氏と頭中将は夜昼同伴して、学問も遊びも共に行う親しい間柄
（五四頁十二行目～五五頁二行目）

■６　五月雨の夜、宿直所に頭中将が訪れて光源氏宛ての恋文を見たがる
（五五頁三行目～八行目「ゆるしたまはねば」）

■７　頭中将は恋文を見ながら他人に見せられない恋文こそ見たいと発言
（五五頁八行目「そのうちとけて」～五六頁三行目「心やすきなるべし」）

■８　頭中将は拾い読みしながら差出人を推量するが光源氏は言葉を濁す
（五六頁三行目「片はしづつ見るに」～七行目）

■９　上辺だけ繕った中身のない女がいると、女の品定めを始める頭中将
（五六頁八行目～五七頁四行目「心を動かすこともあめり」）

■10　芸事の不得手な部分を後見人に隠された女は、付き合うと落胆する
（五七頁四行目「容貌をかしく」～一一行目「恥づかしげなれば）

■11　頭中将は女を上流、中流、下流に分け、中流が個性的でよいと説く
（五七頁一一行目「いとなべては」～五八頁六行目「ゆかしくて」）

■12　好色者と評判の左馬頭と藤式部丞が参上して、女の品定めに加わる
（五八頁七行目～一四行目）

■13　頭中将は成り上がった者も高位から落ちぶれた者も共に中流とする
（五九頁一行目～七行目「おくべき」）

■14　生半可な上達部より非参議の四位の者の方が豊かな生活をしている
（五九頁七行目「受領といひて」～一二行目「いとかはらかなりや）

■15　階級は家柄、世評、財力で決まるが光源氏は財力重視かと揶揄する
（五九頁一二行目「家の内に」～六〇頁三行目）

■16　左馬頭は光源氏や頭中将の前で上流の女について意見するのを憚る
（六〇頁四行目～一〇行目）

■17　左馬頭は荒廃した家の奥に芸事を嗜む女がいたら素晴らしいと語る
（六〇頁一一行目～六一頁五行目「とて」）

■18　姉妹を思い黙る藤式部丞と上流にも理想の女は珍しいと思う光源氏
（六一頁五行目「式部を見やれば」～一一行目）

■19　左馬頭は国の柱石を選ぶのと同様に、妻を決めるのも難しいと発言
（六一頁一二行目～六二頁五行目「ゆつろふらむ」）

■20　一家の主婦には欠けては困る条件が多いので、妻を選ぶのは難しい
（六二頁五行目「狭き家の」～一二行目「なるべし」）

■21　全て希望通りでなくても連れ添うのがよいが惹かれる夫婦はいない
（六二頁一二行目「かならずしも」～六三頁三行目）

■22　無口な女を女らしいと思って機嫌を取ると色めかしくなるのは難点
（六三頁四行目～一〇行目）

■23　情趣を重んじすぎる妻も困るが美しさの欠片もない世話女房も困る
（六三頁一一行目～六四頁五行目「うちまねばむやは」）

■24　妻と語り合いたいが理解のない妻には外での話をする気にならない
（六四頁五行目「近くて見む人」～一一行目）

■25　従順な若い女を仕込むのも手だがやはり妻には頼れる女の方が良い
（六四頁一二行目～六五頁六行目）

■26　身分や容貌より実直な事が妻には大事で、更に才能が伴えば儲け物
（六五頁七行目～一五行目「わざをや」）

■27　夫の浮気に耐えていたが急に我慢出来なくなって失踪する女がいる
（六五頁一五行目「艶に」～六六頁六行目「落としはべりし」）

■28　夫が浮気したからといって逃げ隠れしたり、尼になるのは、軽率だ
（六六頁六行目「今思ふには」～一三行目「思へらず」）

■29　知人が見舞に来たり、元夫が泣いたりすると、女は出家を後悔する
（六六頁一三行目「いで、あな悲し」～六七頁三行目「うちひそみぬかし」）

■30　還俗しても家出騒動の後では夫婦共に心からは信頼し合えなくなる
（六七頁三行目「忍ぶれど」～一〇行目）

■31　浮気されたら喧嘩したり好きにさせるより、怨言を仄めかすべきだ
（六七頁一一行目～六八頁六行目）

■32　妹は信頼出来る妻だと頭中将が暗に言うが光源氏は居眠りしている
（六八頁七行目～一四行目）

■33　格式ある調度は名人が作った物だと誰にでもわかると左馬頭は言う
（六九頁一行目～一一行目）

■34　見たことのない物は空想で描けば良いので墨書きの優劣はつけ難い
（六九頁一二行目～七〇頁二行目「さてありぬべし」）

■35　唐絵と違って大和絵は見慣れた風景を描くので画師の技量が現れる
（七〇頁二行目「世の常の」～七行目）

■36　走り書きは一見洒落ているが本格的な筆法で書かれた書の方がよい
（七〇頁八行目～一三行目「かくこそはべれ」）

■37　僧のように説教する左馬頭と目を覚ます光源氏と真剣に聞く頭中将
（七〇頁一三行目「まして人の心の」～七一頁四行目）

■38　左馬頭は、美人ではないのに嫉妬ばかりする昔の恋人のことを語る
（七一頁五行目～一五行目）

■39　女は左馬頭の為に努力し、尽くしたが、嫉妬深い癖は直せなかった
（七二頁一行目～一〇行目）

■40　左馬頭は別れをちらつかせて、女の嫉妬深い性格を直そうと試みる
（七二頁一一行目～七三頁一行目「怨ずるに」）

■41　左馬頭は女に終生連れ添うつもりなら夫の浮気は我慢すべきと言う
（七三頁一行目「かくおそましくは」～八行目「はべるに」）

■42　離縁を承諾した女に左馬頭が悪口を言ったので女は夫の指を噛んだ
（七三頁八行目「すこし」～七四頁一行目「かこちて」）

■43　官位を貶められて傷ついた左馬頭は出家を仄めかして女の元を去る
（七四頁一行目「かかる傷さへ」～五行目）

■44　左馬頭が女の短所を責める和歌を詠むと、女は泣きながら返歌する
（七四頁六行目～一一行目「はべりしかど」）

■45　左馬頭は女と口論したが別れるつもりはなく、女と復縁したくなる
（七四頁一一行目「まことには」～一五行目「なかりけり」）

■46　左馬頭が行くと来訪を見越した準備がされていたが女は留守だった
（七四頁一五行目「内裏わたりの」～七五頁九行目「答へはべり」）

■47　女は嫌われたがっていた様子だが、左馬頭の衣装の世話はしている
（七五頁九行目「艶なる歌」～一五行目）

■48　見捨てられることはないと高を括っていたら女は心痛で亡くなった
（七六頁一行目～九行目「おぼえはべりし」）

■49　左馬頭は染物や裁縫に秀でた女こそ本妻に相応しかったと追慕する
（七六頁九行目「ひとへに」～一四行目「思ひ出でたり」）

■50　織姫の裁縫の腕よりも末長い夫婦仲にあやかれば良いと言う頭中将
（七六頁一四行目「中将」～七七頁四行目）

■51　左馬頭が同じ時に通った女は人柄がよく、歌も書も琴もうまかった
（七七頁五行目～一一行目「はべりき」）

■52　左馬頭は指喰いの女亡き後女の元に通い慣れたが女は浮気していた
（七頁一一行目「この人亡せて後」～一五行目）

■53　十月の月夜、左馬頭と相乗りした殿上人が行ったのは女の家だった
（七八頁一行目～八行目）

■54　殿上人が縁に腰かけて笛を吹きながら謡うと、女は和琴で合奏した
（七八頁九行目～七八頁一五行目「あらずかし」）

■55　和琴の音が月に相応しいことに感嘆した殿上人は簾に寄って戯れる
（七八頁一五行目「律の調べは」～七九頁四行目「ねたます」）

■56　殿上人がもう一曲請うと女は笛を引き止めるだけの琴はないと詠む
（七九頁四行目「菊を折りて」～八〇頁四行目）

■57　二人の風流な応酬を見るに堪えないと感じた左馬頭は、女と別れた
（七九頁一二行目「憎くなるをも」～八〇頁四行目）

■58　左馬頭は信頼出来ない浮気な女より実直な指喰いの女がよいと言う
（八〇頁五行目～八一頁一行目）

■59　頭中将は恨み言も言わず、自分を頼りにしていた恋人のことを話す
（八一頁二行目～八一頁一二行目）

■60　親を亡くして貧する女は頭中将を頼みとするが彼の妻に脅迫される
（八一頁一三行目～八二頁二行目）

■61　頭中将が放っておいたので幼い子を持つ女は撫子を添えた文を送る
（八二頁三行目～八二頁六行目）

■62　文を読んだ頭中将が訪ねると女は彼を信じきった様子だが涙を流す
（八二頁七行目～八二頁一三行目）

■63　頭中将は女を慰めたが訪れが間遠になると女は姿を消してしまった
（八二頁一四行目～八三頁八行目）

■64　後悔する頭中将はかわいい幼子を探し出したいと思うが消息は不明
（八三頁九行目～八三頁一四行目「はべらね」）

■65　頭中将は女のことを、左馬頭の言う、頼りない部類の女だと断ずる
（八三頁一四行目「これこそ」～八四頁四行目）

■66　いくら完璧でも吉祥天女に懸想するのは、と頭中将が皆を笑わせる
（八四頁五行目～八四頁一四行目）

■67　藤式部丞は身分柄謙遜するが、頭中将に急き立てられて体験を語る
（八五頁一行目～六行目「思ひめぐらすに」）

■68　藤式部丞は文章生だった時に、博士顔負けの学がある女と出会った
（八五頁六行目「まだ文章生に」～一〇行目）

■69　藤式部丞が学問の師である博士の娘に言い寄ると博士は杯で祝った
（八五頁一一行目～八五頁一五行目「はべりしかど」）

■70　女は寝所でも学問を語り、漢文の文を送って藤式部丞の師となった
（八五頁一五行目「をさをさ」～八六頁六行目「はべりしかば」）

■71　藤式部丞は女に感謝する一方で劣等感に苛まれ、自身の宿縁を嘲る
（八六頁六行目「今に」～八六頁一五行目）

■72　久しぶりに訪うと物越しの対面なので藤式部丞はやきもちかと訝る
（八七頁一行目～八七頁六行目「恨みざりけり」）

■73　女は嫉妬はしておらず、薬の悪臭を気にして物越しに対面していた
（八七頁六行目「声も」～八七頁一五行目「すべなくて」）

■74　蒜の臭いに耐えかねて逃げ出す藤式部丞に賢い女は素早く歌を詠む
（八七頁一五行目「逃げ目を」～八八頁七行目「申せば」）

■75　光源氏達は、作り話だ、どこにそんな女がいるものかと呆れて笑う
（八八頁七行目「君たち」～一三行目）

■76　左馬頭は女が三史五経を会得するのはかわいげがないことだと言う
（八九頁一行目～六行目「あらむ」）

■77　上流婦人もしがちだが、半分以上漢字で書いている女の文は残念だ
（八九六行目「わざと」～一二行目）

■78　一角の歌詠みを自任している人が所構わず詠みかけてくるのは嫌だ
（八九頁一三行目～九〇頁一行目「はしたなからむ」）

■79　時と場所を選ぶことが大事で、それが分からない歌詠みはよくない
（九〇頁一行目「さるべき節会など」～八行目）

■80　左馬頭の女性評を聞いた光源氏は藤壺の宮こそ理想的な人だと思う
（九〇頁九行目～九一頁三行目）

■81　葵の上の元を訪れた光源氏は信頼出来る妻だが気づまりだと感じる
（九一頁四行目～一一行目「さうざうしくて」）

■82　寛いでいる時に左大臣が挨拶に来たので光源氏は有難迷惑だと思う
（九一頁一一行目「中納言の君」～九二頁二行目）

■83　夜、光源氏は方違えのために中川にある紀伊守邸へ赴くことにする
（九二頁三行目～一一行目「のたまふ」）

■84　紀伊守は父の家の女達が失礼をするのではないかと密かに心配する
（九二頁一一行目「忍び忍びの」～九三頁二行目「聞きたまひて」）

■85　光源氏は人近なのが有り難いと言い、内密に急いで紀伊守邸へ行く
（九三頁二行目「その人」～七行目）

■86　急な訪問を紀伊守は内心迷惑がるが光源氏の従者達は強引に居座る
（九三頁八行目～一三行目「植ゑたり」）

■87　光源氏は雨夜の品定めで良しとされた中の品はこの階層だと考える
（九三頁一三行目「風涼しくて」～九四頁四行目）

■88　光源氏は気位高いと聞いた伊予介の後妻空蝉目当てで母屋に近寄る
（九四頁五行目～一三行目「わが御上なるべし」）

■89　女達の噂を聞いた光源氏は藤壺の宮への恋が露見しなくて安堵する
（九四頁一三行目「いといたう」～九五頁七行目）

■90　光源氏は女の接待を所望するが紀伊守はわざと気づかぬふりをする
（九五頁八行目～一三行目）

■91　故衛門督の末っ子である小君は空蝉と暮らしていると紀伊守が話す
（九五頁一四行目～九六頁七行目「と申す」）

■92　出仕予定の空蝉が伊予介の後妻となったことを光源氏は不憫と思う
（九六頁七行目「あはれのことや」～一二行目「のたまふ」）

■93　紀伊守は伊予介が空蝉を崇めていることに対し、好色だと非難する
（九六頁一二行目「不意に」～九七頁三行目「と申す」）

■94　光源氏は若い継母に相応しいと思っているらしい紀伊守を揶揄する
（九七頁三行目「さりとも」～八行目）

■95　眠れない光源氏は襖障子に寄って空蝉と小君の会話を立ち聞きする
（九七頁九行目～一五行目「言へば」）

■96　小君に似た声の女が空蝉だと察した光源氏は空蝉の位置を推し量る
（九七頁一五行目「ここにぞ」～九八頁五行目「みそかに言ふ」）

■97　心細い空蝉は中将の君を呼ぶが中将の君は湯浴みのため不在である
（九八頁五行目「昼なら」～一三行目）

■98　うとうとしている空蝉は中将の君が来たと思うが実は光源氏だった
（九八頁一四行目～九九頁四行目「思へり」）

■99　空蝉は怯えるが光源氏に恥をかかせることは出来ないので騒げない
（九九頁四行目「中将」～一二行目）

■100　光源氏が可憐な空蝉を愛しく思い、抱き上げると、中将の君が来る
（九九頁一三行目～一〇〇頁五行目「来あひたる」）

■101　中将の君は光源氏に気づいて驚くが、高貴な人だから引き離せない
（一〇〇頁五行目「やや」～一一行目「入りたまひぬ」）

■102　光源氏は言葉を尽くすが、空蝉は中将の君にどう思われたかと悩む
（一〇〇頁一一行目「障子を」～一〇一頁一行目「あさましきに」）

■103　光源氏から無体な仕打ちを受けた空蝉は低い身分ゆえかと非難する
（一〇一頁一行目「現とも」～六行目「けはひなれば」）

■104　光源氏は身分の違いをまだ弁えていないゆえの振る舞いだと訴える
（一〇一頁六行目「その際々を」～一一行目「のたまへど」）

■105　身分だけでなく容貌まで不釣り合いだと感じる空蝉は光源氏を拒む
（一〇一頁一一行目「いとたぐひなき」～一〇二頁一行目）

■106　光源氏はこれは前世からの因縁による契りだと、泣く空蝉を慰める
（一〇二頁二行目～八行目「恨みられて」）

■107　未婚なら逢瀬を喜んだかもしれないが今は人妻なのでと空蝉は嘆く
（一〇二頁八行目「いとかくうき身のほどの」～十四行目）

■108　光源氏は空蝉との再会も文のやりとりも難しいだろうと心を痛める
（一〇二頁十五行目～一〇三頁五行目「いと胸痛し」）

■109　光源氏は一旦は解放した空蝉を引き止めて泣きながら恋情を訴える
（一〇三頁五行目「奥の中将も」～十行目「いとなまめきたり」）

■110　空蝉は夫を愛していないが夫が自分の不貞を夢に見ることを恐れる
（一〇三頁十行目「鶏も」～一〇四頁一行目）

■111　明るくなり、二人は別れるが、襖が二人を隔てる関のように思える
（一〇四頁二行目～六行目）

■112　光源氏は有明の月を見て後ろ髪引かれる思いで紀伊守邸を出立する
（一〇四頁七行目～十五行目）

■113　光源氏は空蝉の苦しみを思いやりながら、中の品のよさを実感する
（一〇五頁一行目～五行目）

■114　後日、光源氏は紀伊守を呼び出し、空蝉の弟を側で使いたいと話す
（一〇五頁六行目～十二行目）

■115　空蝉の夫婦仲や容貌を知りたく思う光源氏は紀伊守に探りを入れる
（一〇五頁十三行目～一〇六頁六行目）

■116　五、六日後に参上した小君に、光源氏は空蝉のことを詳しく尋ねる
（一〇六頁七行目～十二行目「うち出でにくし」）

■117　光源氏は小君に、自分と空蝉がかつて恋仲だったと偽って文を託す
（一〇六頁十二行目「されど」）～一〇七頁一行目「ひろげたり」）

■118　光源氏の文を読んだ空蝉は泣き、思いがけない宿世を思って臥せる
（一〇七頁一行目「いと多くて」～六行目）

■119　翌日、小君が光源氏への返事を催促するが、空蝉は拒み、弟を叱る
（一〇七頁七行目～十三行目）

■120　空蝉からの返事がないことを知った光源氏は落胆し、再度文を託す
（一〇七頁十四行目～一〇八頁五行目「またも賜へり」）

■121　光源氏は小君を側から放さず、世話をし、親代わりとして振る舞う
（一〇八頁五行目「あこは知らじな」～十三行目）

■122　空蝉は光源氏に心惹かれるが、身分不相応だと思い、返事はしない
（一〇八頁十四行目～一〇九頁五行目）

■123　光源氏は空蝉を始終恋しく思い、逢いたいが人目に触れたらと悩む
（一〇九頁六行目～十行目）

■124　方違えのため光源氏は紀伊守邸へ赴き計略を伝えていた小君を呼ぶ
（一〇九頁十一行目～一一〇頁二行目）

■125　空蝉は光源氏からの文を読むが密会は出来ないので奥の部屋に移る
（一一〇頁三行目～十行目）

■126　空蝉を捜し当てた小君は光源氏に頼りないと思われてしまうと泣く
（一一〇頁十一行目～十四行目「言へば」）

■127　空蝉は子供が恋の仲立ちをするのは慎むべきことだと小君を咎める
（一一〇頁十四行目「かくけしからぬ」～一一一頁三行目「言ひ放ちて」）

■128　空蝉は独身ならばと思うが人妻なので情が強い女で通そうと決める
（一一一頁三行目「心の中には」～一一一頁十行目）

■129　不首尾の由を小君から聞いた光源氏は空蝉を帚木に例えた歌を詠む
（一一一頁十一行目～一一二頁三行目「のたまへり」）

■130　空蝉は光源氏のために奔走する小君が人に怪しまれないか心配する
（一一二行目三行目「女も」～九行目）

■131　光源氏は案内を頼むが姉はむさ苦しい場所にいるからと小君は断る
（一一二頁十行目～一一三頁一行目「聞こゆ」）

■132　光源氏は代償として小君を側に寝かせ、冷淡な姉よりも愛しく思う
（一一三頁一行目「いとほしと」～五行目）

「鷺水庵より」にて、2016 年 09 月 16 日公開データ
2018 年 03 月 24 日、編集まとめ